

アフガニスタン文化遺産復興支援に対する 我が国の取り組みについて (2)

山内和也

The Japanese Contribution to the Rehabilitation
of the Cultural Heritage of Afghanistan (2)

Kazuya YAMAUCHI

本稿は、拙稿「アフガニスタン文化遺産復興支援に対する我が国の取り組み」(『西アジア考古学』第4号、pp. 131-136)に続いて、2003年4月から12月までの動向について時系列的に紹介していくことを目的としている。紙幅が限られているためすべてを網羅できなかった点、また、羅列的になっている点についてはご容赦願いたい。

「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」による「バーミヤーン遺跡保護計画案」の合意と調印

6月2日、情報文化省とユネスコの間で計画案に関する合意と調印が行なわれた。この計画案は3つの柱からなっており、予算は1,815,967米ドルで、期間は2003～2005年の3年間である。

- ・壁画の保存：破壊されて床面に散乱している壁画片を収集し、応急的に石窟を閉鎖する。
- ・予備的保存・活用計画案の策定：文化遺産の保存と復興、将来的な活用の指針となる総合的な計画を策定する。また、あわせて地形図および石窟群の立面図を作成する。
- ・両大仏の崖、龕および残存物の補強：ターリバーン政権による爆破のために崩壊の危機にさらされている大仏龕の補強。とくに東大仏の東側のやや上方に位置する亀裂は仏龕の大規模な崩壊を生じさせる危険性があるため、優先的かつ迅速に補強措置を施す。

「壁画の保存」および「予備的保存・活用計画案の策定」については東京文化財研究所がユネスコと契約を結び、事業を実施することとなった。

東京藝術大学アフガニスタン支援調査団—第2次調査団—

6月9～16日、佐藤一郎(美術学部絵画科教授)団長他2名が派遣された。カーブル国立博物館への写真技術復興支援、カーブル大学との大学間交流のための現地視察などを目的としたものである。

東京文化財研究所によるアフガニスタン文化遺産支援事前調査

6月7～14日、山内和也がアフガニスタンを訪問し、

バーミヤーン遺跡保存事業、保存修復の研修事業およびカーファル・クート遺跡調査のための事前調査を行なった。

カーファル・クート遺跡(ロウガル州)は、一般にはハルワール遺跡として知られている。出土品によれば、この遺跡がアフガニスタンにおける有数の仏教遺跡であることが明らかである。大規模な仏教遺跡というだけでなく、『大唐西域記』に記されている「弗栗恃薩儻那国」の大都城「護苾那」である可能性があるという点でも重要である。また、盗掘による破壊の危機にさらされていることから、早急に何らかの措置を施す必要が確認された。

アフガニスタン文化遺産保護のための国際調整委員会第1回総会

6月16～18日、パリで開催された。日本からは渡邊明義、前田耕作他2名が参加した。会議では、各国あるいは各機関が計画・実施している人材育成や考古学的調査、保存活動、文化財の不法流出の防止、ジャームのミナレットとヘラートの建造物の復興、博物館の復興と人材育成、バーミヤーン遺跡の保存、無形文化財の保存などについての報告と討議が行なわれた。

日本西アジア考古学会第8回総会

総会(6月21日)において、『戦争と文化財：イラクとアフガニスタンの現場から』と題した特別報告で、松本健(国土館大学イラク古代文化研究所)と山内和也が発表した。

バーミヤーン遺跡保存事業—第1次ミッション—

7月12日～8月11日、東京文化財研究所によって実施された。日本からは山内和也他7名が参加した。作業内容は以下の通りである。

- ・マスタープラン作成のための事前調査
- ・壁画の保存修復のための壁画片収集と石窟の一時的閉鎖

壁画片の収集作業を行なった石窟群は計9石窟群で、あわせて石窟の一時的閉鎖を行なった。2つの石窟からは大小数十点にのぼる「樺皮文書」と呼ばれる仏典の断片が発見された。大きさは最大のもので長さ5×幅2cmである。

サンスクリット語で記されており、書体は紀元後7世紀頃の「ギルギット・バーミヤーン第一型書体」である。仏典の内容や形式からみて、経典というより哲学的な文書であると推測されている。

「～平山郁夫からのアピール～流出文化財を守れーアフガニスタンそしてイラク」展

8月12日から開催されたもので、「流出文化財保護日本委員会」が収容したアフガニスタンの「文化財難民」計99点が出展された。

「アフガニスタン文化財保存・修復協力の推進について」報告書

2002年9月から2003年7月23日まで、6回にわたって開催された「アフガニスタン等文化財国際協力会議」の報告書が8月19日に平山郁夫座長から河合隼雄・文化庁長官に提出された。具体的な提言としては、カーブル国立博物館や考古学センターへの支援、バーミヤーン遺跡の地下探査、カーブルの研究拠点の確保などが挙げられる。この会議およびその討議は、今後の文化財分野における我が国の国際貢献を考える点で重要である。

文化財研究所による「アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業のための調査」

9月6～16日、渡邊明義（文化財研究所理事長）団長他5名からなる調査団が派遣された。文化遺産保護の分野における文化財研究所とアフガニスタン情報文化省間の合意書を締結すること、および壁画保存作業のための予備調査と地下探査のための事前調査を行なうためにバーミヤーン遺跡を視察することを目的とした。

バーミヤーン遺跡保存事業ー第2次ミッションー

9月27日～10月26日、東京文化財研究所によって実施された。日本からは山内和也他3名が参加した。第1次に引き続き、壁画片収集と石窟の一時閉鎖を行なった。バーミヤーン谷、フォラディー谷、カクラク谷全体で計33石窟を清掃の後、閉鎖した。今度も仏典の断片が発見されたが、材質、書体、年代とも前回発見されたものと同じである。また、I窟の右繞道からはコーラン断片が発見された。また、仏教壁画の制作年代を炭素14年代測定法によって明らかとするため、壁画の下塗りに用いられている土に混入しているスサなどを採集した。

2次にわたるミッションにより、K窟を除いて、緊急性を要する石窟における壁画の保存修復のための壁画片収集と石窟の一時閉鎖が完了した。

バーミヤーン遺跡地下探査ー第1次ミッションー

文化庁の委託を受け、文化財研究所が9月27日～10月26日に実施した。日本側の参加者は山内和也他4名である。地下レーダー探査法を用いて地下に埋没している遺構の存在およびその分布状況を把握し、遺跡全体の保存・活用に資するとともに、あわせて「王城」や「涅槃仏」の存在を明らかにすることを目指した。調査地点は東西大仏および石窟群が掘り込まれている崖の前面に広がる緩斜面および平坦地で、東西約1.7km、南北100～300mの範囲である。

探査の成果は以下の通りである。崖の前面一帯には土砂が1.5～2.0mの厚さで堆積しており、古代の遺構はこの土砂の下に埋没している。広範囲で遺構の存在が認められるものの、その分布には粗密の差がある。王城や涅槃仏、伽藍の位置は特定できなかったが、探査の成果と『大唐西域記』の記述との比較から、「王城」の候補地（西大仏の南西側）、そして「涅槃仏」および「伽藍」の候補地（西大仏と東大仏の間に位置する扇状地の扇端付近）が推定できた。

2003年度西アジア考古学会定例研究会

「アフガニスタン考古学の回顧と展望」をテーマとし、11月8日から開催されている。主に1979年以前の日本を含めた各国考古学調査団の成果、および今後の調査・保存計画を取り挙げている。

アフガニスタン専門家に対する考古資料の修復技術研修

文化庁の委託を受け、文化財研究所は文化遺産保存修復専門家人材育成事業の一環として、情報文化省・カーブル国立博物館と共同で、11月11～23日、カーブル国立博物館において、14人を対象に「土製考古資料の保存修復」の技術研修を行った。斎藤英俊（東京文化財研究所）他5名の日本人専門家が現地で指導を行なった。修復の基本的考え方、修復記録の作成、修復実習などを行った。

ケリガン遺跡の踏査

10月末から11月初めにかけて、山田明爾（龍谷大学名誉教授）他が、バーミヤーン遺跡の西約120kmに位置する仏教寺院址「ケリガン遺跡」の踏査を行なった。バーミヤーンの西に仏教寺院址が確認されたことは、当時の仏教世界の広がり、そして、バーミヤーンから西に伸びる交易路の存在を解明する大きな手がかりとなる点で注目される。

パーミヤーン遺跡の保存に関する第2回ユネスコ/イコモス専門家会議

12月18～20日、ミュンヘンにて開催された。日本側からは前田耕作他2名が参加した。「東大仏龕の右上方の亀裂と岩塊の補強作業」、「壁画の保存」および「予備的保

存・活用計画案の策定」、「考古学的な活動」についての報告と討議がなされた。この会議は、パーミヤーン遺跡に携わる各機関の情報を共有することができたのみならず、こうした活動がユネスコの枠組みの中で遂行されていく体制が整えられたという点で重要である。

山内和也

東京文化財研究所

Kazuya YAMAUCHI

National Research Institute
for Cultural Properties, Tokyo